

〈エッセイ集企画〉

学外から見る人文学のあり方・可能性

エッセイ① 社会と向き合う人文学—人文学の外から考える、人文学を
学ぶ意義（中村芳雅）

エッセイ② 人文学が与える社会活動への論理（福岡洸太郎）

『人文×社会』の創刊にあたり多くの研究者が研究領域の垣根を越えて学際的な研究発表を投稿されると思うが、ここでは研究領域自体を乗り越えて、研究領域外の社会に活動基盤を持つ人間による人文学論を紹介する。執筆者はいずれも人文学の出身者（あるいは所属者）であり、またこのような場に出稿をするということは、人文学に対して親和性を持つ人間である。したがって、研究領域外に基盤を持つとはいえ、社会一般の人文学論として見るにはあまりにも偏りが大きい。そのため、本企画名は学外における人文学の一般論のような響きを持つかもしれないが、執筆の意図にそのような意図は一切ない。

執筆者は世にいうところの「社会活動」に多少なり携わる（と自負している）ものだが、その活動に至った背景には人文学の学知があることを強く感じるものが集まっている。本企画が示そうとするのは、人文学が社会からどのように見えるかという話でも、社会でどのように人文学が役立つか、という話でもない。人文学のいかなる特徴が「社会活動」の背景となり、またその原動力になるか。これを各執筆者の視点から検討していく。

『人文×社会』のような学術誌は研究者の綿密な議論により、学術の深化を目指して論文が寄稿されるのが一般的ではないかと思う。しかし、「人文学と社会をつなぐ領域を開拓する」ことを目指すならば、人文学の学知を直接的な形で用いるのではなく、その学知を「社会活動」の理念的背景とする

人文学観は、人文学研究に従事する方にも参照できるところもあるのではないだろうか。

なお、本企画の内容は研究の深化を目的とするものではなく、実証的資料を用意して綿密な論理展開を行うが困難なものであるため、投稿形式は論文ではなくエッセイとした。そのため、資料的な甘さや読みづらい点なども多いと思うが、ご了承いただければ幸いである。

(中村芳雅)

エッセイ①

社会と向き合う人文学

人文学の外から考える、人文学を学ぶ意義

中村 芳雅

本稿は人文学の最前線で研究をする人間ではなく、人文学から距離を置いて社会で活動する人間から、人文学を学ぶ意義を語ることを試みたものである。筆者は現在も大学院の人文学科に所属しているが、同時にシステムエンジニアの会社を経営しており、また鹿児島県の離島に在住して無料の学習教室を運営している。これら活動の理由は、単純に「私がやりたいだけ」という個人的理由に還元できるが、同時に「なぜ私がやりたいか」という理由は確実に人文学で得た学知が反映されている。その理由そのものは個人的な領域のため本稿では触れないが、社会で活動する理由に人文学がいかなる役割を有したかということについては、かねてより論じたいと考えていた。

そこで本稿は、社会活動をするに至った背景を作り出す人文学的な理由を、個人的問題ではなく可能な限り一般化して論じたいと思う。

1. 「人文学」と社会のつながり

ミネルヴァのふくろうは、たそがれがやってくるとはじめて飛びはじめる。¹

1 ヘーゲル 著、藤野渉・赤沢正敏 訳(2014年4月25日4版)『法の哲学 I』中央公論新社、p.30

ヘーゲルによれば哲学は現実の一段落したところでその姿を現すものとして捉えられており、これに従えば哲学とは現実積極的に作用するものではなく、あるいは現実の中でその行く末を占うようなものでもないことになる。哲学は現実先立つものではなく、また現実を構築するものでもなく、あくまで現実の観察者の位置に徹するものと言えるかもしれない。したがって人文学の本質を「ミネルヴァのふくろう」と同位とするなら、冒頭から非常に悲しい結論ではあるが、「人文学と社会をつなぐ」という試みはその出発点から挫折を味わうことになる。なぜなら、「ミネルヴァのふくろう」の本分は過ぎ去った現実を総括するところにあり、ようやく飛び立とうとするとき、その現実には既に過去のものとして化しているためである。

現在はヘーゲルの活躍から200年に近い年月が過ぎており、人文学の領域もヘーゲルの時代に比べれば深く広く発展している。そのため、一概に人文学と「ミネルヴァのふくろう」を同一視することはできない。フィールドワーク研究などは社会との結びつきなしには成立しえない研究領域であり、現在では社会と結びついた研究は数多く存在している。学科や領域、あるいは研究者個人によって、同じ人文学内でも社会と結びつきやすいこともあれば、そうでないこともあるだろう。

また、ヘーゲルの哲学論も突き詰めればヘーゲル個人の哲学論に過ぎない。マルクスやエンゲルスがそうであったように、「ミネルヴァのふくろう」とは異なる人文学を唱えたとしても、それが批判こそされても否定されるいわれはない。そのため、積極的に現実に作用する人文学を模索する道もあるし、人文学の見地から未来を推測することもあってよいかもしれない（現にメディアなどでは多領域の専門家がこれに類することを行っている）。

「人文学と社会」の関係性を包括的に論じることは難しいが、現代の人文学では研究内容次第で既に社会と結びついて成立する領域もあるだろうし、また新たな領域を開拓していく可能性も十分にある。研究が社会との関連性なしで成立しないならば、研究者は積極的に社会と関わっていくだろう。研究領域あるいは研究者個人に焦点を絞るなら、社会と結びついた人文学研究は少なからずあり、ここで改めて研究のあり方を問う必要はない、というのが少し極端ではあるが個人的意見である。

しかし、人文学の包括的問題として「人文学と社会のつながり」を見るなら話は変わる。研究内容に応じた社会との結びつきとしてではなく、包括的問題として人文学と社会の結びつきを考えるなら、それは「ミネルヴァのふ

くろう」としての学問のあり方への挑戦にもなりえるからだ。

2. 人文学と社会の根本的不一致

「ミネルヴァのふくろう」としての人文学、すなわち学問を「時間的な過ぎ去りゆくものの外見のうちに実体を、しかも内在的な実体を、そして永遠なものを、しかも現在の永遠なものを、認識すること」²と見るならば、その学問は本質として真理への志向性を有している（と言って過言ではないだろう）。先に挙げたフィールドワークのような社会と結びついた研究は、確かに社会と結びつくことで研究が可能になるが、基本的にその立ち位置は観察者に留まり、現実積極的に作用しようとする例はあまりないのではないだろうか。なぜなら、「ミネルヴァのふくろう」は現実の観察を通じて真理に近づくことを志向はするものの、真理に基づいて現実を再構築することは領域外だからである。

そのため、必然的に人文学においては学問領域外の社会とはそう簡単に結び付けられないような研究が行われることもある。「ミネルヴァのふくろう」を学問の本質とするなら、むしろ社会と結びつく研究の方こそ偶発的なものになる。ところが、昨今の CSR と同期軸で「研究者の社会貢献義務」のようなものを人文学に求められると、この関連性が逆転してしまう。すなわち、「研究は社会貢献を本質とするものであり、真理の追究は偶発的なもの」とされてしまうと、ヘーゲル以前より引き継がれてきた学問の伝統はここで覆されることになってしまう。

研究者に余力があり、その余力で社会貢献をすればよいとも考えられそうなものだが、こちらもなかなか難しいように思われる。研究者も企業のように目に見えて分かりやすい経済力という資産を持つなら、CSR のような社会貢献の体裁を繕うことくらいできるだろう。しかし、研究者の資産は「知」である。この「知」が真理を志向するものであるならば、研究領域外の社会でも真理が追究されているのでもない限り、そう簡単に「知」と社会が結びつくことはできないだろう。

人文学と研究領域外の社会がともに、歩みをそろえて同じ方向を目指すのでない限り、人文学と社会が結びつくことは難しい。それならば、真理を志

2 前掲、p.25

向する限りにおいて人文学が社会に何らかの寄与をすることは、絶望的なものにすら見えるかもしれない。人文学を包括する問題として社会との結びつきを検討するなら、ヘーゲル以前より引き継がれた「ミネルヴァのふくろう」を学問の本質として認める限り、その出発点から論理矛盾を発生させてしまうように思われる。繰り返しになるが、これが障害なく可能になるのは、両者が歩みをそろえて同じ方向を目指した場合、すなわち人文学研究が「ミネルヴァのふくろう」としての本質を捨てて研究領域外の社会への寄与をその本質とする場合、あるいは研究領域外の社会が人文学と共に真理を追求した場合、このいずれかにおいてであろう。突き詰めれば、研究内容に応じた個々の問題としてではなく、人文学の包括的問題として研究領域外の社会との結びつきを考えるならば、そこで課題になるのは人文学と社会の志向するものの不一致に至りつくように思われる。

人文学と社会の方向性の不一致ゆえに、両者が結びつくのは困難、というのは一見深刻そうにも見えるが、これは極論である。実際には方向性が一致しないものがつながった例はいたるところにある。例えば研究界限においても学科が違えば方向性は違うが、それでも共同研究は今日でもしきりに行われている。社会が異なれば方向性も異なるというのは、別段取り立てて扱うまでもない話であり、ここで人文学と社会が結びつく方法を模索することはいくらでもできる。

しかし、これを研究内容あるいは研究者の個別の問題ではなく、人文学を包括した問題として考えるとき、両者の方向性の相違は中々に譲りがたい話になる。なぜなら、真理を志向する人文学が研究領域外の社会と方向性を共有できないとすれば、それは社会が真理を志向していない、ということになりかねないからである。ここで文字通りに「真善美」が一致するならば、社会が真理を追求していないということは、社会に倫理上の善も、審美上の美も存在しないということになる。人文学を学ぶものから見れば、危機感を感ぜずにはいられない事態ではなかろうか。

3. 人文学の「真理」と社会の「真理」

「研究領域外の社会には、真も善も美も存在しない」というのはさすがに言いすぎの感があるが、このように言えば当然次のような反論が来るだろう。「それでは人文学には真理があるのか」と。ここで明確な返答ができるもの

は存在しない。真理の何たるかを知るのは神のみである。人文学の研究者は、真理の追究者に過ぎず、真理の保有者でも管理者でもない。もちろん真理が明らかになればそれに越したことはない。しかし、真理の追究者であることが「ミネルヴァのふくろう」として人文学を人文学たらしめるものであるならば、研究領域外の社会が同じ方向を向かないということは、すなわち社会が真理を追求していないか、あるいは人文学の追究するものが全く真理に結び付いていないかのいずれかになる。

「ミネルヴァのふくろう」を唱えたヘーゲルは、同じ文中で以下のように述べている。

諸政府がこの学科に専念させた学者たちに、哲学の教育と中味についてはまったく彼らを恃むという信頼を表明したとすれば、——どうも、ときおりは、それは信頼というよりはむしろ、この学そのものにたいする無関心さであった（中略）——、諸政府はしばしばそのような信頼にひどいむくいをされたことになるか、それとも、あとの場合、無関心さが見られるようだったとすれば、その結果として根本的な認識がおちぶれたことは、どうやらこの無関心さの罰金とみなされねばならないか、どちらかであろう。³

この言には、これまで本稿が述べてきたことに類似する点もある。ヘーゲルの問題とするところは政府だが、政府の志向するものと哲学の志向するものは全く異なる。したがって、政府が哲学の中味に関心を持たず、その内容をすべて哲学者に委ねた場合、その成果は政府の思惑とは全く異なるものになる。本稿の言わんとするところは、政府を社会に、哲学を人文学に、それぞれ置き換えたに過ぎない。重要なことは、社会が「ミネルヴァのふくろう」に無関心であることである。

考えれば不思議なことではないか。今の世には研究者にならずとも、大学において学問を修めた人間は少なくない。研究領域外の社会という広範な領域ではなく、ヘーゲル同様に社会の範囲を政府に絞っても、そこは大学でしっかりと学問を修めた優秀な先生方で占められているはずである。このような状況において人文学が等閑視されてしまうならば、それこそ異常事態ではな

3 前掲、p.19

いか。政府において「ミネルヴァのふくろう」が一定の価値を有するものとして認められているならば、わざわざ人文学の側から社会との結びつきを問うまでもなく、社会の側から人文学は求められそうなものである。

ところが現実はそのようではない。人文学の側から社会への結びつきを唱える論は数多あるが、その逆は全く耳にすることがない。「真理」とはきわめて曖昧であるが、研究領域外の社会においても、それに類するものを希求する声がないわけではない。世の中には「正義」を求める声があふれている。「永遠なるもの」を求める人は少なからずいそうなものである。しかし、社会で希求される「正義」や「永遠なるもの」が必ずしも「ミネルヴァのふくろう」に結び付けられるわけではない。「正義」や「永遠なるもの」が求められていたとしても、そこで人文学の研究が求められるわけではなく、研究者が記した論文や研究書が人文学外の社会で参照されないとすれば、それは非常に悲しい話ではないだろうか。

「それらの軽蔑のなかで最もたちのわるいのは、前述のように、だれでもが何もしないでもそのまま哲学一般にかんして、よくわけを知っていると信じこみ、ひどい批評をすることができると確信しているということである」⁴ これもヘーゲルの言だが、この状況は現代もそう大きく変わっていないように思われる。仮に、「人文学は社会に役立つ研究をすべきである」あるいは「人文学は社会に全く役に立たない」という論が成立するなら、それは人文学を熟知しつくしたか、あるいは自分こそは人文学を熟知していると知っていると思込んでいなければ出てこない言葉ではないか。

もしかすると、研究領域外においても人文学を熟知した仙人のような人間もいるかもしれない。ところが研究経験がある人間ならば、または人文学の一端に触れた経験があるならば、人文学はその領域の熟知が困難であることを熟知しているだろう（念のために申し上げるが、本稿も人文学の一側面を述べているに過ぎない）。この熟知できないことの熟知は、研究者が人文学をただ学知として知っているのみではなく、その長い伝統と歴史を内面化することで成立する。人文学を内面化するということは、研究者が真理の保有者や管理者ではなく、真理の追求者の一人として、その議論の中に参加するという側面も持つ。

もちろん、人文学の進む道が本当に真理に近づくものであるかという保証

4 前掲、p.15

はない。研究領域外の社会にこそ真理がある可能性は十分にあり、そのことは誰にも否定できない。しかし、人文学の学知は、たとえそれが先駆者たちの個人的見解の集合であったとしても、長い伝統の中で継承されてきた様々な論を反映している。研究領域外の社会の人文学に対して無関心は、学問の伝統への無関心に等しい。社会で真理や正義などが求められているにも関わらず、そこで人文学が顧みられないとすれば、社会の追求する真理や正義が全くの偶然的なもの以外のなにものでもないことになる。

4. 人文学の学知

浅薄さというやつのおもな了見は、学を思想と概念の展開のうえに立てるかわりに、むしろ直接的な覚知と偶然的な思いつきのうえに立てようとすることである。⁵

研究内容や研究者による個別的問題ではなく、包括的問題として人文学と社会のつながりを考えるなら、その難点はこれまでも述べてきた通り、人文学と社会が志向するものを異にしていることが根底にある。しかし、社会が人文学の志向する真理や、あるいは正義などを求める声は多く、これら自体に無関心なわけではない。彼らが無関心なのは、人文学が積み重ねてきた伝統や学知に対してであり、真理や正義を求めても学の蓄積に無関心でいられるのは、「直接的な覚知と偶然的な思いつき」により、自分たちが「よくわけを知っていると信じこみ、ひどい批評をすることができると確信している」ことによる。これは人文学を学ぶ側からすれば、非常に恐るべき事態であろう。

しかし、逆説的かもしれないが、このヘーゲルが言うところの「浅薄さ」こそ人文学と社会がつながる一つの契機になる。人文学は今日において様々な学科や領域に細分化され、また研究内容も非常に深く発展しているが、それでもその学の体系が人間を研究するもの、という点では共通している。それ故に、人文学を継承するということは、伝統的に培われてきた人間観を継承するという面を持つのであり、また研究を通じて新たな学論を導き出すことは、人間観を更新するという面を持つと言える。それは人文学という研究

5 前掲、p.16

領域の内部で継承されてきたものであり、一面においては閉鎖的なものと言えるかもしれないが、一方でこれは決して研究領域内で充足する性格のものではない。なぜなら、人文学が人間について語るならそれは研究者だけではない人間一般について語るのであり、真理や正義について語るならそれは研究者同士でのみ共有しうる真理や正義ではなく、真理一般あるいは正義一般について語るからである。

したがって、人文学研究の意義は決して研究領域内の学論を発展させる自己充足的なものにとどまるのではなく、自然科学などと同様に社会でも適用される価値体系を導き出している。しかし、実際に社会に人文学の学知が求められることはあまりに少なく、あったとしても表層的なものにとどまることが大半である。そこで社会を「浅薄」と悪しざまに言う必要もないが、人文学の学知を通じてその社会を相対的に見ることが可能になる。もちろん、人文学が長い伝統を有するからと言って真理に近いという保証はなく、社会にこそ真理があるという可能性もある。問題はどちらが正しいかという話ではない。少なくとも人文学を学ぶことで、人文学が生み出してきた人間観とは決定的に何かが異なる社会を、この学問の伝統的な学知を通じて少しでも客観的に眺められるようになる。そこであなたは何をするか。それを考えさせるのが人文学ではないのか。

「ミネルヴァのふくろう」として、人文学は現実を分析はするものの、そこに作用することは本文ではない。そのため、人文学が社会に直接的に役立つというケースはあまりなく、結果的にそのような誹りを受けることも多いのではないかと思う。しかし、それこそが人文学の本領ともいえることも確かではないだろうか。

人文学を継承することは、過去の先駆者が導き出した人間像を継承し、そして自身もまた現実を分析してその人間像を更新していくということ面が含まれている。この過程において、「ミネルヴァのふくろう」は現実の観察者としての立ち位置に徹し、基本的に現実に直接的に作用することはない。しかし、ここで得られるものは確かに人文学領域内における閉鎖的な学知の更新として受け取られることもできるが、同時に現実を俯瞰するための視座の提示にもなりえることも事実だろう。

それゆえに、人文学は直接的に「社会がいかにあるべきか」という押しつけがましい問いかけをすることはしないものの、その伝統の継承者に「自身が社会で何をすべきか」を問いかける。これは人文学が社会といかにつながる

かという問いへのアンチテーゼでもあり、同時にこの問いを肯定的な捉えた私なりの意見でもある。なぜなら、人文学はその性格的に社会とのつながるものというよりは、その学習者に社会とのつながり方を考えさせる契機を与えるにとどまるものであり、同時にその契機を得たものがそこで社会とのつながり方を考えるということが、人文学を学ぶことの醍醐味の一つではないかと思うためである。

エッセイ②

人文学が与える社会活動への論理

福岡洸太郎

本稿では人文学に取り組むことがどう社会へ適応可能かを下記の文脈で記述する。

まずは人文学を学ぶこととは何かを捉え直し、次にそれを学ぶことによって得る思考、社会的な表現をすればスキル、を捉え、かつそれがどう社会へ適応され得るのかを記載していく。

1. 人文学を学ぶとは

「人文学の在り方・可能性」を考える上で「人文学を学ぶこととは何か」を考えておくことは避けられない。結論から記述すると、本稿では人文学とは自然科学・社会科学以外の人間に関する学問であると捉える。

この人文学とは何かという議論は歴史的にひも解く必要があるが、これを問い始めるとそれだけで内容が完結してしまうため本稿では割愛する。本稿は、「自然科学と社会科学という、ふたつの科学分野が自立する（中略）展開のなかで、自己の存在を再認識」され、「なしくずしの様相をもって認知された」という理解に基づき、人文学を広く自然科学・社会科学に属さない学問とする程度にとどめたいと思う¹。

自然科学・社会科学“以外”とすると広範な定義だが、人文学を学ぶこととはすなわち、言語文化、行動文化、歴史文化、思想文化を学ぶことであると、2016年の東京大学学科再編前の研究科編成にならって考えることとする。

1 『歴史学事典 11 宗教と学問』（弘文堂）p.382

具体的に学ぶことは何かを考えていくと、この「学ぶこと」の中には大別すると、知識を蓄え、考え方を学ぶこと、すなわちインプットにあたるもの、およびゼミ発表や論文を執筆すること、すなわちアウトプットにあたるもの、これらの二種が内包されている。

東京大学において2016年に4つの学科が統合されて人文科学が設立された。その主旨は、「複雑な世界の課題に対して教育の相乗効果を期待し、人文学的叡智を統合的に運用する人材を輩出することにある」²とされる(私は2014年卒業であり、当時は思想文化学科であった)。

また、文部科学省の「人文学及び社会科学の意義・役割・目的について」という項においてその意義・役割・目的は「文化の継承」であり、「英知の創生」であると記載があり、続いてその実践を「社会への貢献」および「教育への貢献」と表現している。この「社会への貢献」という文言は一見すると人文学の社会適応のあり方を具体的に示唆していると期待してしまうが、「文化行政、環境問題、情報化社会への対応、科学・技術との融合や協働など、社会への貢献も人文学の大きな意義のひとつ。新しい発見、科学技術、あるいは様々な自然科学の発見のベースには、人文学の成果がある。社会全体が二極化し、格差社会が進行している中であって、人間の真の生き方や考え方について提言し、それを支援するという人文学の役割は非常に重要」と、その具体的な貢献の中味については非常に曖昧な記載にとどまっている。また、「教育への貢献」にいたっては人文学そのもの位置づけに関する提案と生涯学習のために意義を捉え直すことができるのかもしれないという程度に留まっている³。

人文学に限らず理科系の研究における新しい技術でさえ社会実装は難しく、大学内における成果で留まることは多いだろう。海外大学における実証実験がその学内から外に出ないという課題はよく挙げられる課題だ。かつ、上に述べたその人文学の定義に従えば、直接社会への適応をすることは前提

2 「文学部「人文学科」の設置について | 東京大学」(https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/articles/n_z1305_00004.html - 2021年3月1日確認)

3 「2. 人文学及び社会科学の意義・役割・目的について：文部科学省」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/015/siryo/attach/1343073.htm - 2021年3月1日確認)

から極めて困難である。そのような中でその意義が議題にあがりやすい人文学の社会実装を考えるなら、直接的な役割ではなく、間接的な意義を考える必要がある。すなわち、人文学を学ぶことで身に付くものであり、かつ社会にも適応しうるスキルを探ること、およびそのスキルを媒介としていかにして社会に適応可能であるのかを考えることが、人文学の間接的な意義を考えるうえで必要になる。当然ヒトのスキルは個によって異なるため、反証例を探すことはたやすいが、ここではその可能性を極力論理的、すなわち一般化しやすい形で記述していきたい。

2. 人文学を学ぶことで身に付くこと

上で確認したように人文学を学ぶことがすなわち言語文化、行動文化、歴史文化、思想文化を学ぶことであると捉えた場合、この学ぶ行為によってどのようなスキルが身に付くのだろうか。

結論を先に述べると、非常に一般的な表現で言えば、“考える”に尽きると考えられる。

言語の成り立ちや発展の背景、人類の行動に関する研究、歴史という人類の営みに関する研究、思想という人類による事象の捉え方に対する研究を通して、人類は“考え”てきた。

例えばヘーゲルは言わずもがな、それを批判したマルクスの言う外化などの相反する考え方、また日本においても例えば西田幾多郎の言う純粹経験の場という考え方は目の前の事象から自己を引きはがし、自己とそれ以外との関係を“考える”きっかけとなってきたと言えるだろう。この様に外界から自己を含めた現世界を捉えようという試みは人文学に特徴的な“考えること”であると言えるだろう。さらに西欧世界において、無神論的実存主義とされるサルトルやニーチェの論考は西欧において生活する人類が神を前提にせず自己存在を捉え、その前提となっていた行動からの解放と目の前の生活に対して新たに向き合うよう“考え”させてきたように思う。

この“考える”スキルは人文学という、目の前の生活とは直接的にはほとんど無縁の学問、一方で人類が直面した課題に一定の方向性を与えてきた学問を学ぶことで身に付けることができる。至極端的な例でいうと、二元論的な考え方とその否定、ジャック・デリダの脱構築等を学ぶことで極端な資本

主義が産む社会課題に対して“考える”ことができるようになる。

この“考える”ことを学問・議論を通して学び、その力を身に付けられるのは、既存の市場経済論理からも政治的力学からも一歩引いた場所で活動することが出来る人文学という場の特徴であろう。

3. 社会への適応可能性

ではこの“考える”スキルを身に付けることがどの様に社会適応可能かについて記述する。

このスキルの適応可能性を考える際にいくつか注意しなければならないことがある。一つは個によってその身に付け方と発露の程度と方向性は異なるということ。二つ目は人文学を学ばないと必ず身に付けることが難しい訳ではなく、人文学を学んだ個に与えられる十分条件ではないこと。三つ目は“社会”への適応はいつ、どこの社会でという前提を常に検討する必要があることである。これらの前提がある時点で具体的な社会への適応としては限定的なものにとどまっており、既に一般化に失敗している。しかし具体的な事例としてではなく“考える”という非表象的な現象の発露としての社会適応を考えるなら、逆説的だがまずその社会的な行動の具体的なあり方について検討する必要がある。なぜなら社会への適応の発露として考えるものは、具体的な行動を通して認知できないからである。

この発露形態において好ましい形態は“利他”と呼ばれる活動だろう。当然考えるスキルを得たことで社会的に“否”とされている活動へと進んでいく可能性もあることは付しておく。ここで断っておきたいのは、人文学を学んだ人類が“誰かのために動く”という社会的に評されやすい行動を取るという意味ではない。ここでいう“利他”活動は主体の利己的な考えから発露されている。すなわち、考えるための枠を学び、それを実社会の現象に適応した際に、“それが正しい”“そうあるべきだ”と絶対的な価値判断を避けるようになる。その上で、ではどうあるべきか、と考えるようになる。ここで重要なことは絶対的な価値判断を、考えるスキルによって放棄しているということだ。このことにより、人類は自身を含めあらゆる既存の価値観、判断基準をそのまま受け入れるという活動から離れる。その際に、利己的に根拠がなくとも“これはおかしい”と否定をする。ヘーゲルの言う否定に近い

観念だ。この否定とその解決（昇華）により現れるのは時として既存の実社会が見向きをしていない、見ていたとしても自己および自己の属する集団の目的と目標と利益とを優先することで放置されている課題に目を向ける視点であり、それは“利他”と呼ばれる活動に結び付く論理を与える。

この放置される課題に対して目を向けることができる考え方が正解として絶対的に存在しているのではなく、それは事象を観たときに考えるきっかけを手にする可能性があるという程度のものだ。それは、より一般的な表現を借りれば“客観的にものを捉える”ことでそうなっている背景や原因、要素に目を向けるということである。ただ“客観的”と強調したのは、それを客観として捉えるのは常に主体であり、その結果絶対的な客観は存在せず、それがゆえに人文学を学んで身に付けた事象に対して“考える”スキルは一定に“客観的”に行使されるものではなく、あくまで主体的、すなわち利己的に行使されるものであるからだ。

このプロセスを経るためには現存する社会という枠組みを文化・歴史・言語・思想といった背景を“考え”、極力客観的にとらえようと試みる人文学の学問だからこそといえるのではないだろうか。

最後に本論の失敗と成功の事例として筆者サマリーを記載する。

4. 筆者サマリー

2012年～2014年思想文化学科宗教学宗教史学専修課程において宗教学概論、死生学、カント哲学、西田哲学、神秘主義等の講義を受けつつ、卒業論文の研究テーマとしては「日本の仏教徒が抱く自死・自殺に対する価値観」を設定した。

日本の仏教研究者が必ず議題に挙げることは、第二次世界大戦中の僧侶が国と一体化を唱えたことである。すなわち無になることが具体的行動としては戦争への賛成と参画へと結びつき、その先に自己犠牲による死を想定していたという事実である。そこで仏典との整合性、および現代の僧侶による自殺予防活動の仏典との整合性を確認し、社会変動に左右されずに今後自殺予防活動を継続できるのかという問いのもとに研究をした。

この研究は宗教者の社会的活動の可能性、現代で言う自殺予防活動の論理の強度を測ることを目標にしたものだった。しかし、今になって考えれば研

究そのものは社会への適応に何ら関係が無いのだが、当時は研究することが社会への適応するものであると無条件に考えていたため、結果的にこの研究は先行研究に従って私の知的好奇心を満たすのみに留まった。

これを機に、研究そのものが直接社会へ適応可能であるとは考えなくなり、そこから“社会”へ貢献するためには普及と活動の促進が求められると考えるに至った。一方で既に僧侶による自殺予防活動は、とりわけ東北大震災以降、宗派を超えて行われている。この宗派を超えて活動している（考え方の垣根を越えて手を携えている）ところに、原点仏教の整合性や論理の強弱は関係を及ぼすことは期待できず、社会活動は社会活動であり、宗教活動とは異なるのだらうと考えるようになった。

卒業論文では研究自体と社会活動の違いを学び、社会活動の原動力は世にいうところの“教義”ではないことを悟ることができた。しかし、これでは現在私が社会活動をする原動力は何かということを説明できていない。私が社会活動をする原動力、すなわちここに寄稿する理由はもう一つある。

それは各種思想や定義の探求をする中で、現代の資本主義や民主主義に対する懐疑と過去の過ちを繰り返さないための論理づくりという取り組みを始めることができたのは、人文学を学んだことが大いに寄与していると考えているからだ。

例えば仕事をする前に“仕事とは何か”を考え、そこで資本主義への賛同と参画の論理を組み立て、後の世への影響を納得し、覚悟する前に実行することをしない（正しくはできない）姿勢が身に付いた。この思考は、近代以降の“自由”と“主権”および冷戦以後の“資本主義グローバル社会”を前提とせずに捉え直す思想家、たとえばサルトルの自由に対する問いやデリダの二項対立に対する問い、の書籍を読み、学友と議論したことが最も重要な体験だったと考えている。本稿で強調した“考える”スキルは同じ人文学を学ぶ学友との議論の中で培われたのであり、当時の研鑽なしに現在の私を考えることは到底不可能であるようにすら思われる。

私は現在、インドに基盤を置いて仕事をしており、様々な要因から努力をしたくても努力することができない環境を無くすことを目的として活動している。インドも日本同様“民主主義”を標榜し、そこには個人の権利と責任が前提とされている。すなわち自己努力による経済的な自立が求められてい

る。同時にインドにおいて顕著なことは、この自己努力の困難さである。カースト制度の影響による貧困の固定化、差別からそもそも自己努力の機会すら与えられずに生を受けている。この土地で影響を及ぼすようになり、それまでの学問が現在にどう繋がっているのか、極力一般化に努めながら記載した次第である。

最後に断っておきたいのは、当然ながらこの様なものの捉え方は大学を出ることやまして人文学を学ぶことは必要条件でも十分条件でも決してあり得ない。人文学を学んでいるからこそなどという姿勢では学問も社会活動も経済活動も不用意な課題へ向かってしまうであろうことを付し、自己への戒めとともに論を終えたい。